

## 学んだことの唯一の証は、変わることだ

理学療法学専攻 古井 透

大阪河崎リハビリテーション大学・大学院リハビリテーション研究科修士課程は3年目を迎え、第3期修了生が見事にリハビリテーション学修士号を取得されることとなり、誠におめでとうございます。思い返してみれば、過去2年間、臨床現場での勤務の傍らで修士課程の学修と独自の研究活動の Multiple Task をバランスよく遂行されてきたものと想像いたします。本当に寝る間を惜しんでの汗と努力の結晶が、修士論文として結実されたものと思い、心より敬意を表します。

少し昔を振り返ってみてください。リハビリテーション専門職養成課程の学部時代の学修は、どちらかと言えば各領域の資格試験で必修内容が明確に設定され、ほぼレディーメードと言っても過言ではありません。常に正しい答えが用意され、正答率の高さは要求されても、創造性や好奇心は、ややもするとノイズになったり、能率の妨げだったかもしれません。

しかし本来、学問と言うものは、永遠に問い続けるものであり、「正しさ」の上に安住する姿勢とは真逆の知的営為であるべきです。

私は研究室に「教師の根本の仕事はむしろ学ぶことだ」という言葉を掲げています。

これは、東北大学教育学部長・宮城教育大学学長を歴任し、哲学者としての生涯をかけた問いをもって、小学校から定時制高校まで15年間教壇に立ち生徒たちと向かい合った、林 竹二(1906-1985)と言う人の言葉です。林先生は、たとえ世間が不良と言うような生徒でも、常に生徒に問いかけ、その答えを吟味しながら、一人ひとりを深い思索に至らせた人です。その林先生が言い続けた言葉に「学んだことの唯一の証は、変わることだ」というものがあります。

大学院での学びは、研究テーマやゴールまで自らの手で計画書を作成しながら、進行してきましたね。にもかかわらず、成果物としての修士論文は、今見返してみると、方法論の修正や、結果の解釈について、さらに研究の限界について、各自が苦しんだり、考察でたくさん汗をかいたのに、「とりあえず時間切れ」で、まだまだ未完な部分が見つかり悔しい思いで一杯の人もいるかもしれません。しかし、それこそが大学院で「学んだことの証」です。あなたが研究を始める前と「変わったこと」ではないでしょうか。

もはや用意された正解に安住できないのです。

自前で問い直してみないと気が済まなくなっているに違いありません。

ようこそ、答えがたった一つではない現実の世界へ！